

佐藤紘光委員の横顔と学説

放送大学助教授 齋藤正章

はじめに

平成15年度の公認会計士第2次試験の試験委員として佐藤紘光先生が任命された。

これを機会に佐藤先生が地道に積み重ねてこられた研究成果に広く関心が寄せられることを心から喜びたい。多くの人が佐藤先生の業績に触れることによって、わが国の原価計算研究ひいては管理会計研究がより厚みを増して発展して行くと感じるからである。

プロフィール

佐藤紘光先生は、昭和18年に愛知県にお生まれになり、昭和42年に早稲田大学商学部を卒業され、そのまま大学院に進学された。大学院では、青木茂男先生に師事し、前田幸雄先生、津曲直躬先生のもとで学ばれた。その間に公認会計士第2次試験に合格し、理論と実務の双方を深められた。管理会計学者を自称されながらも、財務会計分野にもめっぽうお強いのはおそらくこの頃の経験が生きているのではないだろうか。昭和47年には早稲田大学社会科学部に奉職され、今日に至られている。

研究者としての佐藤先生は一言で言えば「理論の人」である。緻密な理論展開を得意とされ、その議論には隙がない。大学院時代から理論指向で、就職後も線型計画法を援用した予算管理論をテーマに研究が続けられていた。その佐藤先生に転機がおとずれたのは昭和56年～58年におけるカ

ナダの名門校ブリティッシュ・コロンビア大学における在外研究のときであった。いわゆる「エイジェンシー理論」との出会いである。佐藤先生の留学当時、ノーベル経済学者のCoase教授の論文「企業の本質」に端を発した組織の経済学の発展期で、会計学の分野もその成果を取り入れ、その理論展開が盛んに行われるようになっていた。しかも師事したのは、当時から現在まで第一線で活躍中のFeltham教授であり、その同僚のButterworth教授であった。最高の環境と人に恵まれ、佐藤先生は一気にその才能を開花させられ、わが国におけるエイジェンシー理論の会計研究者のなかで草分け的存在となられた。また、他の研究者からは尊敬の意味を込めて「ミスター・エイジェンシー」と呼ばれている。なお、その成果の一部は『業績管理会計』（新世社）にまとめられている。

教育者としての佐藤先生は教室では厳しく教室外では温かい。ゼミが終わると必ず居酒屋へ行き、ゼミ生と酒を交わされる。学生はそこで広く人生について学ぶのである。また、ゼミ合宿ではビジネス・ゲームを行い、実践的な教育も行われている。

大学では若くして学部長を務められるなど、要職をこなされている。また、学会でも役職を務められている。ご本人は日頃から「その時間があれば研究をしたい」と言いながら、根からの研究者ぶりを披瀝されている。

学 説

佐藤先生の学説を一言で表現すれば、「エイジェンシー理論による管理会計システムの解明」といえるであろう。ここで、エイジェンシー理論とは、プリンシパル（依頼人）とエイジェント（代理人）の契約関係に着目し、そこに働く利害調整のメカニズムにもとづいて組織の仕組みやその構成員の行動原理を説明しようとする経済理論のことをいう。

このプリンシパル・エイジェント関係においては、たとえば財産の所有権をもつ株主とそれを委託され運用する経営者との関係があげられる。このとき、経営者が努力して得た成果は株主に帰属するという外部性が生じる。そのため、ともすれば経営者は株主のためというよりは自己の利益のために機会主義的な行動を起こす可能性が出てくる。こうした利己的な行動の結果生じる損失は株主の負担になる。この損失はエイジェンシー・コストと呼ばれる。

つまるところ、組織における管理会計上の問題は、このエイジェンシー・コストをいかに低減するかにあるといえるのである。巷間メディアを賑わせている「モラル・ハザード」という用語ももともとはこのエイジェンシー理論などで議論されてきた専門用語である。

エイジェンシー理論はさらに不確実性や情報、インセンティブといったキー・コンセプトを論理操作の中心に位置付けて議論を展開することによって、その結果の分析を通じて現実の企業が直面しているさまざまな組織上の問題の本質を自ら考え理解する手がかりを提供する可能性を秘めているのである。

先ほどあげた『業績管理会計』をひも解くと、数式が出てきて、それだけで拒絶反応を示してしまう読者もおられるかもしれない。しかし、数式はあくまでも理論展開を厳密に行うための道具であり、脇役である。栗の「いが」を怖がっていたのでは、おいしい栗にありつくことはできない。

数式の展開が分からなくとも、数値例が用意されているので、自分で計算機をたたきながら、その数値を当てはめてみて理解しようとするのが大切である。

佐藤先生のもう1つの代表的著作は、『株主価値を高めるEVA®経営』（中央経済社）である。この著作には、エイジェンシー理論は表だってでてこないが、その背後にあるテーマは一貫してエイジェンシー・コストの低減にある。本書を読み進めるにはまず株主価値についてのしっかりした理解が必要になる。また、ここで語られている企業観を理解することが今後の展開を理解するのに欠かせない。

次に、インベストメント・センターとしての事業部の業績評価方法について整理を行う。これまで、伝統的には事業部の会計利益やROI（投下資本利益率）が用いられてきたが、残余利益の派生物である経済利益に焦点を当てて議論を展開しているのが本書の特徴である。

この経済利益の理解には会計上費用として認識されない株主資本の機会原価（株主資本コスト）の理解が大切である。

このような経済利益の議論は、管理会計の知識のほかに財務会計と経済学の広範な知識が要求される。このように幅広い分野をカバーしながら理論展開を行えるのは、まさに佐藤先生の独壇場である。

数式も『業績管理会計』ほど多くはないが、読者はまたまた電卓を片手にその議論を追ってほしい。

おわりに

最後に手前味噌になって恐縮であるが、佐藤先生の講義を聞く機会が広く読者に与えられることをアナウンスしておこう。私の勤務する放送大学で佐藤先生が客員教授を勤められており平成15年の4月からラジオで『管理会計』の授業が行われる予定である。また、そのためのテキストも市販される。（放送曜日、時間は未定）